

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520320

研究課題名（和文） ポルトガル語・スペイン語における名詞句構造の対照分析

研究課題名（英文） Contrastive analysis of the noun phrase structures in Portuguese and Spanish

研究代表者

藤田 健 (FUJITA TAKESHI)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50292074

研究成果の概要（和文）：本研究は、ポルトガル語・スペイン語における名詞句に関わる現象、特に名詞の選択する項及び所有形容詞の統語的位置づけと関係節の構造に関して、形態音韻論及び意味論的な視点を交えながら、生成文法をはじめとする統語理論に基づいて分析をした。特に、カートグラフィーに基づいて名詞句内に生起する要素のより詳細な位置づけを提示すると同時に、それぞれの要素の持つ機能的役割を明らかにした。両言語間の相違点にも着目し、スペイン語とポルトガル語における冠詞や所有形容詞の性質の違いが、名詞句の統語構造に大きな影響を与えていることを示した。

研究成果の概要（英文）：In this study we made an analysis of several important phenomena concerning noun phrases in Portuguese and Spanish. Especially we argued about the syntactic status of the arguments selected by the head noun and that of the possessive adjectives, and the syntactic structure of the relative clauses, based on such syntactic theories as the generative grammar and the functional grammar, incorporating morphophonological and semantic points of view. We presented a well motivated structure of noun phrases in the cartographic analysis, specifying the function assumed by each argument of the head noun. As for the diversities between these two languages, we showed that the characteristic differences of articles and possessive pronouns have great effects on the syntax of noun phrases.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ポルトガル語、スペイン語、名詞句

1. 研究開始当初の背景

ロマンス諸語において、独自の特徴を示すポルトガル語（以下葡語）とスペイン語（以下西語）は、言語学の様々な領域において興味深い現象を呈する言語である。充実した記述文法が既に発表されている両言語ではあるが、多くの現象が記述的説明の段階にとどまっており、理論的にどのように分析されるかという観点では研究が未だに不十分な状況にあると言える。本研究が対象とする名詞句は、統語論において極めて重要な多くの現象を示すと同時に、その構造が極めて捉えにくい統語単位である。両言語が提供する豊富な名詞句にかかわる言語現象は、多くが未解決のままであり、確固たる理論的枠組に基づいた統語分析が待たれる状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は、従来の研究では明らかにされなかった葡語と西語の名詞句に関する諸現象を、理論的枠組に基づいて明示的かつ簡潔に説明するのが目的である。主に統語的な観点を中心に、意味論的な側面も視野に入れながら、特に両言語に特徴的な現象に焦点をあて、より対照言語学の観点から詳細な名詞句構造を提示することを目指す。

3. 研究の方法

研究の方法として主に採用するのは、現在の統語論において最も信頼できる理論的枠組の一つである生成文法である。生成文法は、あらゆる統語構造を明示的に提示することを可能にする極めて優れた統語理論である。ただ、名詞句の構造を分析するには名詞の持つ固有の意味的側面を無視することができない。そこで、統語理論の中でも語彙に関する意味的な視点を取り入れることのできる機能文法や、語彙の持つ意味構造を明らかにする概念意味論の視点も随時導入する。また、形態音韻的な特性も考慮に入れる必要がある。このため、統語的側面を中心に据えながら、意味的側面、携帯音韻的な側面も視野に入れ、総合的に名詞句構造を明らかにする。

具体的な研究の手順としては、葡語・西語の名詞句に関する特徴的な現象の中から3点に注目し、それぞれについて詳細な分析を提示した。具体的には、名詞句における項の位置づけ、形容詞の位置づけ、関係節の構造である。

4. 研究成果

頁の制約により、本研究の成果を全てここに示すのは不可能であるので、ここでは特に

重要な成果についてのみ概説する。

(1) 名詞句における項の位置づけ

名詞句における項をどのように位置づけるかという問題は、名詞句の構造を考察する上で最も根本的な問題の一つであると言える。本研究では、葡語の名詞句における項がどのように実現されるかを詳細に分析する。ここで示された分析は、基本的に西語の名詞句構造にも適用可能な一般性を備えたものである。

① 具象名詞の場合

現実世界に存在する具体的な事物を指示対象とする、いわゆる具象名詞の場合、単独で生起することが少なくないが、項を伴うことも多い。この場合、名詞は様々な意味役割をその項に対して与えるが、その多くに対応する格標示要素として前置詞“de”が挙げられる。本研究の分析では、この要素が主要部名詞に後続することから、属格の具現化であると考えられる。

(1) a perna da mesa the leg of-the table

主要部名詞の複数の項が、属格によって標示されることも可能である。

(2) o quadro do Douro do Júlio Resende the picture of-the of de um colecionador japonês of a collector Japanese

主要部名詞の項は所有形容詞で表すこともできる。所有形容詞は所有者項を表すのが一般的であるが、その他に動作主項や対象項を表すことも可能である。

(3) a sua fotografia (the) his photo (対象・動作主・所有者)

所有形容詞が主要部名詞の前と後ろに同時に生起することも可能である。この場合、興味深いことに解釈に制限が課される。すなわち、「所有者>動作主>対象」という階層に従って解釈されるのである。

(4) a minha fotografia tua (the) my photo your

この階層性は、名詞句内においてそれぞれの項が占める以下の位置関係によって説明される。

[_{NP} (所有者項) [_{N'} (動作主項) [_{N'} N (対象項)]
いずれか一つの、所有形容詞は所有者格の照合を受けるために、より上位の機能範疇の投射内の位置に移動しなければならないが、最小

連結条件によってより名詞句内で上位にある所有形容詞が移動しなければならない。このため、このような意味役割に関する制約が課せられるのである。

② 動詞派生名詞の場合

抽象名詞の中でも、動詞から派生した動詞派生名詞は興味深い現象を提示する。葡語の動詞派生名詞句において特徴的なのは、動作主項が前置詞“de”ではなく“por”によって標示されねばならないという点である。

- (5) a. a edificação pela empresa
the construction by-the enterprise
b. *a edificação da empresa
the construction of-the enterprise

本研究では、動詞句について仮定されている殻構造を名詞句にも適用し、受動態の構造と平行的に、動詞派生名詞においては上位の n 主要部に受動形態素 PAS が併合されると仮定する。前置詞“de”は、項構造に記載された意味役割を担う名詞句の構造格である属格のマーカである。受動構造における動作主名詞句は項構造においては記載される意味役割には対応しないために、属格で表示されることができず、前置詞“por”によって導入されねばならないと説明される。

動詞派生名詞の動作主項が品質形容詞で表される場合もある。この場合、生起可能な位置に強い制約がある。主要部名詞に後続する語順のみが許容され、前置は不可能である。また、対象を表す要素が主要部名詞と動作主を表す形容詞に介在してはならない。

- (6) a. a invasão indonésia
the invasion Indonesian
de Timor-Leste
of Timor east
b. *a indonésia invasão
the Indonesian invasion
de Timor-Leste
of Timor east
c. *a invasão de Timor-Leste
the invasion of Timor east
indonésia
Indonesian

この事実は、動作主の意味役割を担う形容詞句が付加詞としてのステータスを持つことによると考える。付加詞である動作主項は、受動形態素に主要部移動し同一指標を付与されることによって統語的に認可されると仮定する。主要部名詞は機能範疇へと移動するため形容詞が主要部名詞に後続することになり、殻構造の下位に位置する他の項は形容詞に後続することが説明される。

最後に、名詞句の項が所有形容詞によって表される場合を見ておく。所有形容詞は動作主に対応する要素と対象に対応する要素の

いずれを表すことも可能である。

- (7) a. a sua destruição de Timor-Leste
the its destruction of Timor east
b. a sua destruição pela Indonésia
the its destruction by(-the) Indonesia

この事実は、いずれの場合も所有形容詞がより上位の機能範疇の投射内で所有格を照合されることが可能であるということを示している。(7b)において、動作主を表す前置詞句は付加詞であるために、対象項に対応する所有形容詞の上位の位置への移動に関して最小連結条件の違反を引き起こさない。このために、(7)はいずれも文法的となると説明される。

③ まとめ

以上、葡語の名詞句における項の構造的な位置づけ、及び認可条件について分析を提示した。重要な主張点は三点ある。第一に、動詞句と平行的に名詞句にも殻構造を導入した点である。第二に、動詞派生名詞句の構造において受動形態素を設定した点である。第三に、名詞句内に生起する名詞の格照合について、機能範疇によって照合される所有格と名詞主要部によって照合される属格を区別した点である。これらの仮定は、近年展開されているカートグラフィ分析による詳細な機能範疇の設定と組み合わせることによって、名詞の語彙的な情報を取り込みながら、より説得力のある名詞句の統語構造を提示する可能性を示すものであると言える。

(2) 関係節の構造

名詞を修飾する関係節を導く関係詞はいくつかのカテゴリに分類される。ここで分析対象として取り上げるのは、西語及び葡語において補文標識として用いられる形式である“que”と、基本的に西語においてのみ見られる定冠詞を伴う形式である“el que”である。

① 非制限用法の関係節の位置づけ

西語においては、制限用法と非制限用法で関係代名詞の分布が異なる。これは、両者の統語的位置づけが異なるためであると考えられる。本研究では、非制限用法における関係代名詞が独立した代名詞として機能し、関係節がある程度の自立性をもった節として機能していると考え、名詞句において周辺的な位置である DP への付加位置を占めると仮定する。関係代名詞と先行詞との統語的關係づけについては、Agree 操作による両者の同一指標付けによって認可されると考える。

② 関係代名詞“que”

関係代名詞“que”は、西語及び葡語において最も頻繁に用いられる関係詞で、同様の形式は他のロマンス諸語にも見られる。関係節において主語・直接目的語の他に、前置詞の目

的語としての機能を果たす点が、他のロマンス諸語には見られない特徴である。

- (8) La casa en que vive no es
the house in that (he) lives not is
demasiado lujosa.
too luxurious
- (9) Vê-se o mar da casa em que
is seen the sea from-the house in that
vivemos.
(we) live

補文標識と同一の形式であるという点から、英語の関係代名詞として用いられる“that”では空演算子が関与し、“that”自体は補文標識としての位置を占めているという分析が Haegeman(1994)等において提示されているが、本研究もこの分析に従うこととし、西語及び葡語においては、以下に示されるように、前置詞が関係節を選択する構造に再分析されると仮定する。

- (10) [DP ...N...[PP P [CP OP que ...]]]

西語と葡語において分布が異なるのは、非制限用法の場合である。西語では前置詞の目的語として機能する“que”が非制限用法として用いられないのに対し、葡語では使用可能である。

- (11) *La empresa, en que trabajo
the enterprise in that (I) work
desde hace dos años, se dedica
since ago two years itself dedicates
a la chacinería.
to the pork butcher's
- (12) O meu cão Fritz, a que
(the) my dog to that
costumavas fazer festas, morreu.
(you) used to caress died

この事実は、西語においては前置詞が空の要素とともに PP を構成できないという、以下の PF のフィルターがあるためであると仮定する。

- (13) *[PP P e] (e は空の要素を表す)

西語においては、非制限用法において(10)の再分析が適用されないために(13)に抵触し、(11)が非文となる。これに対して、葡語においては、西語の“el que”に対応する関係代名詞が存在せず、“que”が果たす関係節導入要素としての機能の範囲が広いことから、(11)の適用が非制限用法においても可能であり、(12)が(13)のフィルターに抵触しないために文法的となると説明される。

③ 関係代名詞“el que”

“el que”は、“que”と並んで西語において広く用いられる関係代名詞である。葡語においても同様の形式“o que”が存在するが、これ

は先行詞を持たないいわゆる独立用法か、節を先行詞とする用法に限られ、通常の名詞句を修飾することはできない。

- (14) a. Eu não sei o que o João
I not know the that the
sabe.
knows
- b. Daniel chegou na hora, o que me
arrived on time the that me
surpreendeu.
surprised

これに対して、西語の“el que”は、独立用法のみならず、通常の名詞句を先行詞とする関係代名詞として用いられる。ただし、前置詞の目的語としての機能に限られるという制約がある。

- (15) Mi padre me prestó el dinero del
my father me lent the money of-the
que yo no disponía.
that I not had

この関係代名詞の構造については、定冠詞の部分が D 主要部で、それを補文標識の“que”によって導かれる節が修飾すると考える。葡語の“o que”が西語の“el que”と異なり、名詞句を先行詞とすることが不可能な点については、葡語においては D 主要部である定冠詞が先行詞と同一指標付けができない要素であるためであると仮定する。これは、西語と異なり、葡語の定冠詞の代名詞としての自立性が強いためであると考えることができる。

次に、“el que”が前置詞の目的語としてしか用いられない点については、フランス語等の他言語の事実を考慮に入れると、定冠詞の存在がその原因となっていることが示唆される。そこで、本研究では PF における形態音韻的なフィルターを設定する。具体的には、顕現的な D を主要部とする DP が、名詞句の投射内において単独で名詞に後続するような連続を排除するものである。

- (16) *[NP N' DP] (D≠φ)

このフィルターは、名詞に別の名詞句が決定詞を伴って後続すると解釈に支障をきたすためにその連続を避ける効果をもたらすものであり、名詞に後続する DP において、関係詞が名詞の補部となっている例の非文法性も説明するものである。

- (17) *Los diputados la mayoría de los
the delegates the majority of the
cuales votó la ley disfrutarán de
which voted the law will-enjoy of
vacaciones.
vacations

これに対して、“que”は D 主要部が空である

ために(16)のフィルターが関与せず、前置詞を伴わずに関係節を導入することが可能となると説明される。

西語“el que”・葡語“o que”のいずれも独立用法として機能できる点については、両言語において定冠詞が照応表現としてではなく、単独で指示機能をもっているために可能となると説明される。

最後に、葡語“o que”が節を先行詞とする用法がある点については、対応する西語の“lo que”との対比でその性質が明らかになる。

(18) Juan traje una lista de cifras, lo
brought a list of numbers the
que explicaba su inquietud.
that explained his concern

西語の“lo”は中性冠詞と呼ばれ、特定の名詞句ではなく、抽象的な概念に対応する要素である。節はまさにこのような要素であり、“lo que”が関係詞として用いられるのは当然であると言える。葡語には西語の“lo”のように抽象的な概念に対応する冠詞は存在しない。このため、無標の形式である男性単数の定冠詞“o”がその機能を果たす。このため、“o que”が節を先行詞とすることができると説明される。

④ まとめ

本研究では、西語の“el que”及び葡語“o que”の統語的位置づけを分析した。複雑な分布を示すことで知られる関係代名詞であるが、ここでの分析に従うと、その分布は統語的制約を基本としながらも、代名詞としての指示機能や音韻的な条件である PF のフィルターが関与するということになる。統語論・意味論・形態音韻論という三つの領域の関連性という視点を導入することによって初めて、関係代名詞及びそれが導く関係節の特徴が明示的に捉えられるのである。

(3) 所有形容詞の位置づけ

所有形容詞は、言語によってその名詞句内における位置づけが異なる、統語的に興味深い要素である。西語と葡語においては、所有形容詞が異なる分布を示す。

① 西語における所有形容詞

西語の所有形容詞には名詞に先行する形式と後続する形式がある。前者は音韻的に後続する要素に依存するという特性をもっているのに対し、後者は音韻的に独立した形式としてふるまう。そこで、ここでは前者を接語形所有形容詞、後者を独立形所有形容詞と呼ぶこととする。

(19) a. su reacción
his/her reaction
b. la reacción desinteresada suya
the reaction disinterested his/her

接語形所有形容詞に特徴的なのは、冠詞と共起できないという点である。

(20) *el mi hermano
the my brother

Giorgi and Longobardi (1991)は接語形所有形容詞は表層において冠詞が占める位置、すなわち D 主要部を占めていると分析しているが、本研究もこの立場をとる。ただし、基底の位置から D 主要部に移動すると分析する。

所有形容詞が基底において占める位置については、NP の上位に位置する PosP という機能範疇を想定し、接語形・独立形いずれの所有形容詞もその指定部に導入されると仮定する。これは、Brugè(2002)において提案されているカートグラフィーに基づく名詞句構造を発展させたものである。独立形は PosP 指定部にどまったままで、上位の機能範疇へと移動する N 主要部に後続する。これに対して、接語形は移動する N 主要部よりも上位にある D 主要部に移動するため、名詞に先行するのである。

接語形が D 主要部に移動する動機づけとしては、定冠詞のもつ[+定]という意味素性を接語形がもっているためであると仮定する。この仮定は、接語形には特定の数量形容詞と共起できないという分布上の制約が課せられるという事実によって支持される。

(21) *tus algunas obras
your several works

独立形は定性に関する素性は指定されていない。このため、数量形容詞との共起に関して制約はない。

(22) algunas obras tuyas
several works your

② 葡語における所有形容詞

葡語における所有形容詞も名詞に先行する場合と後続する場合がある。西語と異なるのは、所有形容詞が名詞に先行する場合でも冠詞と共起可能な点である。一般に定冠詞や指示形容詞と共起する場合には名詞に先行するのに対し、不定冠詞と共起する場合や無冠詞の場合には名詞に後続する。

(23) a. os meus amigos
the our friends
b. um livro meu
a book my

この事実から、葡語の所有形容詞は名詞に先行する場合でも D 主要部の位置には移動しないと言える。

本研究が前提とする名詞句構造では、N 主要部は常に上位の機能範疇の主要部に移動する。従って、所有形容詞が名詞に先行する

場合には、N 主要部が移動する機能範疇よりも上位の位置に移動するということになる。具体的には、[+定]という素性の照合を行う機能範疇(XP)が DP の下位にあり、その指定部に所有形容詞が移動すると考えることができる。

(24) [DP *os* [XP *meus* ... [HP [H *ti* *amigos*]
[PosP *ti* [Pos *tj*][NP *tj*]]]]]

これに対して、名詞に後続する場合は、西語と同様に基底の PosP の指定部に位置すると説明される。

③ 属格表現の重複

西語に特徴的な所有形容詞に関する現象として、属格表現の重複があげられる。これは、属格に対応する表現として所有形容詞と前置詞句が共起するという現象である。スペインの西語では2人称敬称に限られるか、ラテンアメリカの西語では3人称の場合にも見られる。

(25) a. *su libro de usted*
your book of you-sg.
b. *su novio de Juana*
her boyfriend of

属格表現が重複する場合、属格表現に対応する前置詞句も所有形容詞と同様に PosP 内に生起すると仮定する。所有形容詞と前置詞句内の名詞句が同一指示であることが、PosP 内での素性照合によって認可される。

この現象には二つの制約が観察される。一つは属格表現が有生物を指示する場合にのみ可能であるのに対し、無生物では不可能であるという点、もう一つは属格表現が所有者の意味役割を持つ場合にのみ可能であるのに対し、その他の意味役割では不可能であるという点である。

(26) a. **su capítulo del libro*
its chapter of-the book
b. **sus problemas de la gente*
their problems of the people

この事実は、名詞句の機能という観点から捉えることができる。属格表現が重複することは、あらかじめ所有形容詞で指示した対象を前置詞句でもう一度指示するという操作であり、指示対象が注意をひきやすい顕著な存在である必要がある。現実世界においては無生物よりも有生物、特に人間が圧倒的に顕著な存在であり、意味役割という点からは名詞句において階層の上位に位置する所有者が注意を喚起しやすいと言える。このことから、有生物及び所有者という意味的制約が課せられると考えられる。

④ まとめ

本研究では、生成文法において飛躍的な進

展を見せているカートグラフィーの手法に基づく名詞句構造の中で、所有形容詞がどのように位置づけられるかという問題の一つの解答を与えた。西語・葡語はこの問題を考察する上で有益な現象を提示する言語であり、ここでの分析は他のロマンス諸語、更にはそれ以外の言語における所有形容詞にもてきよう適用可能なものである。

また、特に従来説明されていない複雑な統語現象を分析する上でカートグラフィーが極めて有効な分析方法であることを、本研究は示したと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 藤田 健、ポルトガル語における名詞句の統語構造、北海道大学文学研究科紀要、査読無、第124号、2008、103-135
- ② 藤田 健、スペイン語における“que”及び“el que”を用いる関係節の統語構造、言語研究の諸相(北海道大学出版会)、査読無、2010、151-181
- ③ 藤田 健、スペイン語における所有形容詞について、北海道言語文化研究、査読有、第8号、2010、85-103

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 健 (FUJITA TAKESHI)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50292074

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し